【 第３１回　記念館小企画展 】

大洲における中江藤樹のあゆみ

展示期間：平成３０年3月1日（木）～平成３１年2月２８日（木）

展示会場：近江聖人中江藤樹記念館

中江藤樹は、慶長１３年（１６０８）、高島郡小川村の中江吉次の長男として生まれ、９歳の時、祖父吉長に連れられて米子に移り、翌年、藩主の加藤貞泰が伊予大洲へ国替えとなったことにより祖父とともに大洲へと移りました。その後、寛永１１年（１６３４）に大洲を脱藩して、小川村に帰るまでの１７年間を大洲で過ごしました。

中江藤樹は、大洲において、幼き頃より勤勉さと勉学への優れた能力を発揮し、四書を独学で習得するなど正に勉学の道一筋に歩んだ１７年間であったといえます。途中で祖父母が亡くなり天涯孤独の身となるも、武士としての信頼も厚く、郡奉行に任ぜられ誠実に勤めを果たしました。また、自ら勉学に励むとともに、若い武士たちに学問を教え、その学徳や指導の優れた内容から、大洲においても藤樹の学問が根を下ろし、将来にわたって藤樹の教えが大切にされ、尊敬されることへとつながっていきました。

この度の小企画展では、子ども時代から、立派な武士として活躍するまでに成長した大洲の地での中江藤樹のあゆみをテーマとして、①「大洲における中江藤樹」、②「大洲の町並みと中江藤樹のゆかりの史跡」、③「大洲における中江藤樹の顕彰のあゆみ」の３部構成で、当時を偲ぶ文書や肖像画、写真などを展示しています。

①【大洲における中江藤樹】

第１部では、大洲での中江藤樹の様子を知る資料として大洲藩に残る記録、役職を記した肖像画、中江藤樹の文書、明治時代に印刷された中江藤樹の逸話絵図、中江藤樹を直接指導した天梁和尚の書などを紹介しています。

１０歳で祖父母とともに大洲に移り住んだ中江藤樹は、その年の冬に風早郡の奉行となった祖父と共に１３歳の春まで風早郡で過ごし、この間に様々な書物を読み、学びを深めた。１１歳の時、孔子の教えを説いた『大学』の本の「天子より以て庶人に至るまで壱是(いっし)に皆身を修むるを以て本と為す」という文に出会って大変感激し、自分も生涯かけて学問に努めて、聖人になることを志そうと決心し、生涯の目標がはっきりと定まった。

大洲へ戻った翌年の１４歳の時、祖母が亡くなった。この頃より曹渓院の天梁和尚に書や詩を習い始めた。１５歳の時、元服を迎え、独立するが、その半年後、祖父吉長も亡くなった。故郷から遠く離れた大洲で一人になってしまったが、この年、祖父吉長の家督を継ぎ、伊予大洲藩の藩士として、禄１００石を賜った。

１７歳の時、京都から来た禅僧から、『論語』を習い、その後、『四書大全（大学、中庸、論語、孟子)』を独学で学び、朱子学に傾倒する。１９歳の時、郡奉行に登用された。２０歳の頃から共に学ぶ仲間が現れ、２１歳のとき『大学啓蒙』などの本を自分で書き、彼らに与えた。

中江与右衛門肖像画
（大洲高等学校所蔵）

２２歳の時、１３年ぶりに小川村に帰郷し、父の墓参りと母との再会を果たし、２５歳の時にも母を伊予に迎えるために小川村に帰郷した。その帰路に喘息を患い、これが生涯の持病になる。

２７歳の時、母への孝行と健康上の理由により藩に対し辞職願いを提出するが叶わず、脱藩し、しばらく京都に滞在した後、小川村へ帰った。こうして中江藤樹の大洲時代は幕を閉じた。その後、大洲藩からは、多くの武士や後に医者として活躍する大野了佐などが門人として小川村の中江藤樹のもとに学びに来ている。

②【大洲の町並みと中江藤樹ゆかりの史跡】

第２部では、過去・現在にわたり、大洲の町並みに溶け込む中江藤樹を感じ取っていただけるよう、大洲市街の地図にゆかりの史跡の写真を配し、現在の様子や位置関係を紹介しています。

中江藤樹が仕えた大洲城は、伊予を南北につなぐ大洲街道・宇和島街道などが通る交通の要衝の場所にある。明治２１年（１８８８）に大洲城の天守閣が取り壊されたが、平成１６年（２００４）に復元された。大洲城内の見晴らしの良い高台に藤樹座像が置かれ、藤樹座像の台座には藤樹の業績等が石碑に刻まれており、大洲での武士としての活躍が偲ばれる。藤樹座像は、大洲城の天守閣と故郷の近江の方にも向いている。

大洲城と故郷の小川村を望む藤樹像

また、大洲高校の敷地の中には、当時、中江藤樹が実際に暮らした屋敷跡に「至徳堂」が建てられ、現在も修養場として使われている。「中江の水」といわれる藤樹が実際に使っておられた井戸を観ることもできる。大洲高校には教育環境の浄化等のねらいのもと、「藤樹青年像」が建てられており、台座には「知行合一」の文字が刻まれている。この像のために広々とした深遠な庭が作られており、大洲の方々の藤樹に対する尊崇の念の深さが感じられる。

さらに、大洲小学校にも「藤樹少年像」が建てられており、藤樹教育が熱心に進められている。

至徳堂（大洲高等学校）

③【大洲における中江藤樹の顕彰のあゆみ】

第３部では、藩校「止善書院明倫堂」設立にかかわる資料や３代に及ぶ藤樹像の写真を紹介しています。また、明治時代に描かれた中江藤樹贈位を記念する肖像画を展示しています。

中江藤樹の心学が大洲で大きく取り上げられ、再興したのは、享保１７年（１７３２）に川田雄琴が大洲藩に招かれてからである。川田雄琴は三輪執斎に陽明学を学び、三輪執斎の推挙により、伊予大洲藩の第五代藩主の加藤泰温（やすあつ）、第六代藩主の泰衛（やすみち）に仕えた。

川田雄琴は三輪執斎から大洲に中江藤樹の祠堂を建立して藤樹心学を盛んにすることを委託された。延享４年（１７４７）に、藩校「止善書院明倫堂」の学舎が完成した。伊予八藩の中では最も早く設けられた藩校であった。明倫堂には孔子像に加え王陽明と中江藤樹の画像が祀られていた。明治５年（１８７２）に廃校となった。

藩校「止善書院 明倫堂跡」

大洲の陽明学は、中江藤樹を始祖とし、その学風は大洲・新谷両藩に継承され、川田雄琴が大洲藩に招かれることにより、大洲藩・新谷藩の教学の基礎となった。

また、大洲における中江藤樹の顕彰事業としては、延享４年（１７４７）に１００年忌祭礼、明治３０年（１８９７）に２５０年祭記念事業、昭和３３年（１９５８）に生誕３５０年祭、平成１９年（２００５）に生誕４００年記念碑「孝」建立等の儀式を行っている。

明治３５年（１９０２）に、大洲藤樹会が発足し、以後、銅像の建設や藤樹会主催の研修会の開催などの様々な顕彰活動に取り組んでいる。昭和２８年（１９５３）には大洲藤樹子供会も発足している

大洲市の藤樹顕彰の一環として作られた大洲城の藤樹像は、戦中の資材供出等の憂き目を経たが、大洲藤樹会をはじめとした住民の熱心な活動により再建された。現在の銅像は３代目となった。